

受験番号

16

氏名

(1/6)

問題一 次の漢字の読みを平仮名で書きなさい。

- ① 玄人 ② 破綻 ③ 赤口 ④ 潰瘍 ⑤ 控除

問題二 次のカタカナの部分を漢字に直して書きなさい。

- ① 鼻水をタラす。
② 返済がトドコする。
③ 勝利をオサめる。
④ 喉が力ワく。
⑤ 糸がカラまる。

問題三

次の□に漢字を入れると、四字熟語になります。正しい漢字を書きなさい。また、解答题紙の「読み」の欄に完成した熟語の読みを平仮名で書きなさい。さらに、その意味を後のア～クから選んで、その記号を解答题紙の「意味」の欄に記入しなさい。

- ① □科玉条 ② 酒□肉林 ③ 胆大□小 ④ 当意即□

- ア その場に应じて機転をきかすこと。
イ 相手の気持ちを瞬時に理解すること。
ウ 大胆に見えるが、実は気が小さいこと。
エ 大胆で、しかも細心の注意を払うこと。
オ 非常にぜいたくな酒宴のこと。
カ 古代ペルシャ人の理想郷のこと。
キ 尊ぶべき大切な法律・規律のこと。
ク 絶対に逆らえない権力者のこと。

問題四 次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。

生命倫理学と環境倫理学は、アメリカ合衆国を中心に、一九六〇年代の終わり頃から形成されてきた。もちろん、その背景をなしている最大の事柄は、現代の科学技術および産業社会の発展が、皮肉にもさまざまな矛盾と問題を引き起こしたことである。これについてはすでにいろいろと論じられているから、簡単に象徴的な話題として「脳死と臓器移植」および「環境問題」という言葉だけを力けておこう。

ところで、これまでの一般の議論のありようを振り返ってみると、生命倫理と環境倫理、さらには動物保護の倫理について、それぞれ別個に問題とされ、議論されることが多かった。生命倫理学の関わる問題群と環境倫理学が関わるそれとは領域を異にしているから、別々に議論されて当然だというのだろうか。両者のよって立つ倫理的な原理が②異なっているというのである。私はいずれでもないと思う。生命倫理学と環境倫理学の問題群は、ひとつにつながっている。それゆえにまた、倫理上の原理も別々であってはならないと思う。つながりを示す言葉は、やはり「生命」であり、さらに「自然」である。特に、われわれ自身が「身体」という自然でもある、と考えることが重要だろう。

②、生命倫理と環境倫理を別々に論じていると、ただちに矛盾した態度に陥る可能性がある。医療の場面では、例えば心臓移植を可能とするためには、いわゆる「脳死」状態を人の死として承認しなければならない。あるいは、延命技術の残酷さや医療コストの観点から、「植物状態」の人についてまで死の定義を拡張する議論もある。また、人工妊娠中絶や特に選択的中絶の議論でも、どこかで人格的生命と生物学的生命とを線引きして、前者にのみ生きる価値を認めるといふ議論になる。このように、生命倫理学にあつては、生命の価値を「人格」に限定しようとする傾向が強い。これに反して環境倫理学にあつては、②現

受験番号	
16	
氏名	

(2/6)

代の環境問題の元凶を、近代文明を推し進めてきた^③中心主義の態度に見て、動物の権利やさらには自然一般の権利を認めることにより、自然と人間との倫理的な関係を確立しなければならぬ、と主張される。自然環境を人間にとって有用なもの、価値あるものと見なし、もっぱら人間のために自然を利用してきたところに現在の環境問題の原因があると考えらるからだ。したがって環境倫理にあつては、存在する価値あるものの範囲が人間を超えてゆくことが要請されるのである。

これは矛盾した態度だと言わざるをえない。一方で人間に関しては、価値ある存在の範囲をできるだけ狭め、他方では自然に関しては、価値ある存在の範囲を、人間を超えて拡大しなければ環境問題の根本的な解決はない、と考えているからだ。現代のわれわれは、医療の場面と自然環境の問題場面とで、いわば二枚舌を使うように二重のモラルをもつて生きているのだろうか。

(A)

ところが、この矛盾はあまり深刻に実感されない。^⑥医学・医療技術に関わる倫理問題と環境に関わる倫理問題を結びつける必要のない制度上の別領域が確保されているからだ。もつとわかりやすく言えば、両方の問題を同時に考えなければならぬ人はあまりいない、ということだ。例えば大学病院の医師は、一般市民として環境問題に関心をもつことがあつたとしても、自分の職業上の必要に迫られて考えなければならぬのは、生命倫理上の問題である。哲学者の場合でも、両方を同時に考えようとする人は少なく、たいていは生命倫理を専門とするか、あるいは環境倫理を専門とする。一般的に言えば、社会的な役割の分化とその制度化のおかげで、生命倫理と環境倫理を同時に考えなければならない人はほとんどいないのである。^⑦この場合には、矛盾した態度はあまり深刻には考えられないだけであつて、矛盾が解消されているわけではない。

両者に矛盾はない、とはつきり主張できるのは、両者を同時に考えようとし、しかも倫理上の原理に統一性を与えようとする哲学者(倫理学者)の立場だろう。例えばピーター・シンガーがその一人だ。シンガーは動物解放の倫理を考えてきたし、同じ方向で医療上の倫理問題も考えてきた。そこには、はつきりとした一貫性があるし、^④中心主義のある種の乗り越えが意図されている。シンガーの一貫した立場を、「反種差別主義的パーソン論」および「痛感一元論」と呼ぶことにしよう。^⑥

シンガーにとって倫理的に価値ある存在として捉えられるのは「パーソン」だが、「パーソン」とは生物学的な意味での「ヒト」という種のことではなくて、自己意識を有し、自らの苦痛を自覚し、未来というこの意味を知っている存在者のことだからだ。ここでは「人間」というアイマイな概念が「パーソン」によって限定されているばかりでなく、同等ないし類似の能力(特に痛感能力)を有する別の種(類人猿をはじめとするいわゆる高等動物)が「パーソン」の仲間に加えられる道がつけられている。動物解放論の根拠はここにある。

シンガーが動物解放論で問題にするのは、第一に動物実験であり、第二には巨大産業化している畜産だ。いずれの場合も必要な、無意味な苦痛を動物に与えているのであつて、それをよしとする人の生き方は倫理的ではない、ということになる。畜産に関してはさらに、先進諸国での肉の消費量と、牛・豚・鶏飼料のための穀物消費量の莫大さが指摘され、第三世界での窮状を思うとき、いっそう肉食主体の生活形態の不道德さが問題視されるわけである。

こうしたシンガーの発想の根幹をなしているのは、(高等な)生命的存在者が等しく有している苦痛からの解放に対する関心ということだ。苦痛から解放されたいということが等しい利害関心だとするならば、われわれはその関心を無視できないばかりか、その関心を共有する存在者のすべての範囲に道德的考慮の枠を平等に拡大しなければならない、と考えられる。

こうしてシンガーにあつては、動物解放論の議論がそのまま広く環境倫理の展開へと応用されてゆく。遠い未来世代の人々の苦痛からの解放と快適な生活への関心が考慮されなければならないばかりか、現代のわれわれの物質的豊かさを確保するための自然破壊(例えばダム建設)が他の動物たちの苦痛を帰結することがないかどうか也十分検討されなければならない、と言われる。また、巨大な食肉産業についても、それ自体による森林破壊や飼料生産のための化学物質投入の問題性が指摘されたり、メタン・ガス発生による地球温暖化の問題が指摘されて、いっそう菜食の重要性が主張されたりもする。こうしてシンガーは、^④中心主義の克服という、環境倫理学によって一般に要請されている課題を引き受けると同時に、自然物そのものの価値や権利を認める^⑤デュー・エコロジー等のアイマイさを批判することによって、彼自身の一貫した立場の強みを強調するのである。

シンガー倫理学の一貫性をなしているのは、苦痛からの解放に対する関心を最大限かつ平等に考慮する、という原理であつた。ここで前提になっているのは、苦痛を感じる能力であり、苦痛からの解放を求める意識の能力だ。こうした能力を欠いた生命体は、道德的関わりから排除される。植物、単細胞動物、昆虫、爬虫類、魚類が排除される。同じ根拠にもとづいて、人間の胎児や重度の脳障害をもつ人も同様に排除される。そればかりか、生後一カ月以内の新生児についてさえ、^⑩原則的には排除の可能性を認めている。親になる人が中絶を望む場合と類比的に、新生児の生存を親が望まぬ場合に限って、^⑩嬰兒殺しが原則的に許される、とシンガーは主張するのである。

(3 / 6)

このような倫理は、明らかに、われわれが生きていく上で可能な限り葛藤を生み出さないための「方策」としての倫理ではないだろうか。しかし実際には、生きていくことは葛藤に満ちている。動物を虐待することが非倫理的なことは当然だとしても、樹木や草花を暴力的に取り扱うことは本当に何の問題もないのだろうか。肉食を可能な限り減らすことは必要なことだとしても、われわれはともかくも何かを食べなければならぬし、他の生命体を食べなければならぬ。一定の条件のもとでの中絶を社会的に合法的な行為と規定したとしても、それぞれの事情のなかでわれわれはやはり苦悩する。他の生命を断つことによってしか生きられぬわれわれの生のありようそのものに、根源的な葛藤があるのだ。

例えば、動物実験についてもこうした慎重さが必要だろう。本質的に実験科学の一つである近代医学は、動物実験を絶えず必要視してきた。動物実験とは本質的に人体実験の代用品である。ところが、人体実験は非倫理的ではあっても、動物実験は何の問題もない、と考えがちだ。①、人間のために有益だということによってどんな動物実験も正当化できるかどうか、いつでも十分吟味する必要があるし、当の動物実験が本当に他に代えがたい不可欠の実験であるかどうかは、絶えず検討しなければならない。〔中略〕

人間の環境のなかで自己意識を有するわれわれは、生きていくなかで絶えず葛藤を「葛藤」として自覚する。また、場合によっては、自己意識を欠いたものを単純に排除することはできず、背負ってでも共に生きようと意志しもある。そしてまた、なんらかの生命体を食べなければ生きてゆけないことは他の動物でも同様なのだが、ただ人間だけがそのことに自覚的でありうる。自己の生きていく上での矛盾や葛藤に目覚めており、自覚的であること、他者に応答し、責任を担い、他者を背負ってでも共に生きようとするし、生きたいと欲することができると、私は、〔関係性〕のなかでのそのような道徳的振る舞いにこそ、意識と自己意識の道徳的尊厳を認めたいと思う。

こういう意味での意識と自己意識を有する「人格」は、他人の痛みのわかる人である。他者の苦痛を本当に自分のものと感じ、受けとめることができる人である。そのように受けとめたとき、その他の苦痛をなんとかしたいと思ったり、何もできない自分に絶望したりする。それが人間性である。

②、私が受けとめる苦痛が、そのまま他者自身の苦痛であると決めつけることは危険である。そして、私が理解する苦痛を他者自身の苦痛として除去してやることを倫理性と考えることは、もっと危険だ。シンガーは、二分脊椎症のようなまれな事例を取り上げながら、あたかも一般に障害児の生がきわめて悲惨で苦痛に満ちたものであるかのような印象を、医師の報告を権威の後ろ盾としながら与え、そうした苦痛を除去するがゆえに、積極的な安楽死こそが場合によっては最も人道的であると論じる。まるで、「苦痛」を認めることができるし、認めてやるのは医師と倫理学者のみである、と言わんばかりである。「苦痛」を第三者が規定することができると思うことの危険性は、ここに極まっている。ナチスが障害者の組織的虐殺を「慈悲による死」(Gnadentod)として実施したことを、もう一度思い起こさねばならないだろう。他人の苦痛をそのまま共有することは原理的にできないし、他人の苦痛をこちら側から規定することも許されない。「苦痛」については、そうした自他の非対称性を自覚しておくことが必要であり、苦痛の「能力」を客観化し、実体化してはならない。③

私は、シンガーとは別の意味で、生命医療倫理と環境倫理とが同じ視点で探求されねばならないと考える。その点について、水俣病を取り上げて論じたい。

水俣病(熊本県水俣病)は、水俣湾・不知火海をチッソ株式会社(現社名)が排水によって汚染させ、汚染された魚介類を食べるることによって起こった中毒症であり、世界で初めての、環境汚染を背景とした食物連鎖による有機水銀中毒症である。中枢神経や各臓器を侵される全身的な疾患であり、障害だ。水俣病からは実に多くのことを学ぶことができるが、目下の文脈できわめて重要なことのいくつかに触れると、まず第一に、人間に被害が及ぶ前に、自然界に異変が生じるということ。水俣では死魚が浮上し、ネコの「踊り病」が話題になり、カラスの乱舞が観察された。特定の環境にしか生きられない動物たちは、人間よりはるかに弱者だ。第二に、環境汚染による被害は平等には起こらないということだ。つまり、弱者に集中するし、特定の生活形態の人々に集中する。水俣病に関して言えば、子ども、老人、胎児といった生物的弱者および貧困漁民という社会的弱者に集中したし、漁業を営む人たちに集中した。第三に、環境汚染による被害は単純に死滅や絶滅ではなくて、実に多様な形をもった長期にわたる健康障害であり、生活破壊であり、社会的な差別と抑圧による苦悩を伴っているということだ。

「環境問題」と聞くと、あたかも人類全体が平等に「生き残り」の問題の前に立たされているかのような気になるが、そんな事態が起こるとしても、それは最後の最後の時だろう。環境問題というのは、実は、長期にわたる健康障害(病気)の問題であり、弱者(子ども、女性、貧困者、第三世界)がより多く被害を受け、排除され、強者が生き残っていくという問題なのだ。そして地球環境破壊は、地域的な環境汚染の集積とみなされなければならないと思う。因果関係と責任関係が比較的明瞭な地域的

受験番号
16
氏名

受験番号	
16	
氏名	

(4/6)

環境汚染による被害を「公害」と定義するならば、地球環境破壊は公害の集積なのである。

このように見てくると、生命倫理学にとっていわば試金石となるのは、「弱者」と「障害者」の視点の有無であろう。水俣病にあつては、「胎児性水俣病」という障害を生み出したし、多様な形態での疾患と障害を生み出した。「中略」〔生命の倫理〕は、弱者を保護すると同時に、障害者を排除しない倫理基準を求めなければならない。しかも誰もが容易に障害者となりうるのが現代である。つまり現代は、〈慢性病の時代〉とも呼びうるように、成人病、慢性病が疾病の中心をなしつつあるし、また〈高齢化社会〉であり、多くの危険に満ちた〈リスク社会〉でもある。慢性病は病人という状態であるよりもむしろ障害者という状態だし、高齢化や交通事故・都市災害などによって障害者となる危険性も高い。さらに言えば、「障害者」という概念は結局は社会の価値観の反映という面をぬぐえない。その意味では、いかなる人も弱点や障害から自由ではありえないのである。

それぞれの社会は、何をもって「障害」と捉えているのかについて、絶えず反省的でなければならない。「障害」を固定化することなく、社会的な制度とテクノロジーの発展によつて、障害が障害とはならないような社会を形成するとともに、障害への差別意識を解消する努力を継承しなければならない。

(丸山徳次「生命の倫理・自然の倫理」〔所収『生命倫理学を学ぶ人のために』世界思想社〕)

(注1) ピーター・シンガー (Peter Singer) …オーストラリア出身の哲学者、倫理学者 (一九四六～)。プリンストン大学教授。功利主義的観点から生命、環境、社会の倫理について幅広い議論を展開している。著書は『動物の解放』(一九七五)、『実践倫理学』(二〇一一) など多数。

(注2) デイープ・エコロジー…ノルウエーの哲学者アルネ・ネス (一九二二～二〇〇九) が提唱した新たなエコロジー。彼は、人間の利益を目的とする従来の環境保護の活動を「浅薄な(シャロー) エコロジー」(Shallow ecology) と見なし、それに代わる新たな活動、すなわち人間を含む全ての生命体の環境保護それ自体が目的である活動を深い(ディープ)エコロジー(Deep ecology)と名づけて、環境倫理学の新時代を築いた。著書は『ディープ・エコロジーとは何か』(一九八九) など多数。

(注3) 二分脊椎症…胎児の脊椎骨が遺伝的・環境的因子によつて形成不全となり、髄膜瘤、運動・感覚麻痺、排尿・排便障害などが生じる先天的な病気。

問1 傍線(1) (8) のカタカナの部分の漢字に直して書きなさい。

問2 空欄(2) に入る適切な語を、次の①～⑤の中から一つ選んで、その番号で答えなさい。

- ① さて ② ところで ③ そもそも ④ しかも ⑤ いわんや

問3 傍線(3) (10) の漢字の読みを平仮名で書きなさい。

問4 空欄(4) に入る適切な語を、次の①～⑤の中から一つ選んで、その番号で書きなさい。

- ① 自然 ② 人間 ③ 経験 ④ 神 ⑤ 生命

受験番号			
1	6		

氏名

(5 / 6)

問5 傍線(5)の「矛盾した態度」とは、具体的にどういうことなのか、それを九〇字以内で説明しなさい。

問6 次の文が入る適切な箇所を、空欄(A)(B)(C)の中から一つ選んで、その記号で答えなさい。

私はむしろ、葛藤を真に「葛藤」として自覚し、葛藤の解決にあたっても慎重であり、あくまでも真剣であろうとすることに倫理がある、と考える。

問7 空欄(6)に入る適切な語を、次の①～⑤の中から一つ選んで、その番号で答えなさい。

- ① しかし ② むしろ ③ というのも ④ したがって ⑤ また

問8 空欄(7)に入る適切な語を、次の①～⑤の中から一つ選んで、その番号で答えなさい。

- ① さて ② にもかかわらず ③ なぜなら ④ しかし ⑤ さらに

問9 傍線(9)の「肉食主体の生活形態の不道德さ」について、筆者がそう思う理由を具体的に一四〇字以内で説明しなさい。

問10 傍線(11)の「ばかり」と同じ意味の「ばかり」を含む文を、次の①～④の中から一つ選んで、その番号で答えなさい。

- ① 息子は勉強しないで毎日遊んでばかりいる。
② 主人は病気で一週間ばかり会社を休んでいた。
③ 街頭で泣かんばかりに立候補者が有権者に頼み込む。
④ 少し油断をしたばかりに、登山客が遭難をした。

問11 傍線(12)の「自他の非対称性」とは、具体的にどういうことなのか、それを一二〇字以内で説明しなさい。

問12 傍線(13)の「その意味では、いかなる人も弱点や障害から自由ではありえない」とは、具体的にどういうことなのか、それを一二〇字以内で説明しなさい。

問13 本文における筆者の立場に適合するものを、次の①～⑤の中から一つ選んで、その番号で答えなさい。

- ① 現代のわれわれは、医療の場面と自然環境の問題場面とで、二重のモラルをもって生きているのだが、それは、社会的な役割の分化とその制度化のおかげで、生命倫理と環境倫理を同時に考える必要がなくなったからであり、そのことを問題視することは、むしろ時代錯誤であろう。
- ② 苦痛からの解放に対する関心を最大限かつ平等に考慮する、というシンガー倫理学における原理の前提は「苦痛を感じる能力」であり、この能力を欠いた生命体は道徳的関わりから排除されるのだが、だからと言って、人間の胎児や重度の脳障害者ならまだしも、生後一か月以内の新生児にまで排除の可能性を認めるのは問題である。
- ③ 実験科学の一つである近代医学は、動物実験を絶えず必要視し、それを人体実験の代用品と見なしてきたのだが、動物実験が他に代えがたい不可欠の実験であるという従来の医学的立場は原則的に今後も変わらないであろう。

受験番号		
1	6	

氏名

--

(6 / 6)

④ シンガーは、一般に障害児の生がきわめて悲惨で苦痛に満ちたものであるがゆえに、積極的安楽死こそが場合によっては最も人道的であると論じているが、彼のこのような立場には、「慈悲による死」という名の下にナチスが実行した障害者の組織的虐殺を思い起こさせるような或る危険性がある。

⑤ 環境問題というのは、実は、長期にわたる健康障害（病気）の問題であり、弱者（子ども、女性、貧困者、第三世界）がより多く被害を受け、排除され、強者が生き残っていくという問題であって、その解決のためには、弱者を保護すると同時に障害者を排除しないような生命倫理の基準作りが不可欠である。その意味で、環境倫理学は生命倫理学に基づかねばならない。